小規模大学における新型コロナウイルス感染症対策下の「心理学実験」実施報告 2

Implementation Report on “Basic Experiments of Psychology” under anti-COVID-19 Measures at Small Private College 2

高濱 祥子

愛知みずほ大学

Sachiko TAKAHAMA

Aichi Mizuho College

キーワード： 大学における心理学教育；心理学実験；実験プログラム；新型コロナウイルス感染症対策.

1. 背景

新型コロナウイルス感染症（以下、感染症）拡大への対応として、文部科学省高等局（2020）等の通知を受け、本学では、2020 年度後期は前期と比較すると対面で実施する科目が増加した。本稿では、2020 年度前期開講科目「心理学実験Ⅰ」（高濱, 2020）に続き、コロナ禍における 2020 年度後期開講科目「心理学実験Ⅱ」（2 年次配当、2 単位）の事例を報告する。[1]

2. 感染症対策としての授業開始前準備および授業における環境整備

2020 年度後期開始時期である 2020 年 9 月は、対面で授業を開始した。あわせて、感染症拡大の状況に応じて対面授業と Microsoft Teams を使用した遠隔授業(オンライン）を併用したいわゆるハイブリッド授業を展開し、履修登録者が自由意思に基づき授業形態を選択できるように計画した。なお、本学における「心理学実験Ⅱ」の科目担当者は 1 名であり、履修登録者数が密閉・密集・密接（三密）を回避できる人数であったため、クラス分けをせず 1 クラスのみを対象に開講した。授業回数は 15 回 （1 回の授業は 2 コマ） であった。

第 1 回講義において、ガイダンスを実施し、感染症拡大の状況によっては授業実施形態、実習順序、実習内容に変更が生じる可能性があることを周知した。

1）対面授業における教室の喚起および消毒

2020 年 9 月より対面授業を開始した。授業時間中は、教室のドアと窓を全開にし、換気扇を回した状態とした。消毒について、高濱（2020）からの変更点は以下のとおりであった。直前の授業時間に別科目でパソコン教室を使用する科目があること、かつ科目担当者が「心理学実験Ⅱ」以外の科目を別教室で開講しているため、科目担当者による授業開始直前のパソコンと周辺機器、机および椅子の事前消毒が不可能であった。そこで、感染症対策の観点から、授業開始時に履修使用パソコンと周辺機器の消毒を履修登録者自身で実施するとともに、前後左右に他の履修登録者がいないよう市松模様に着席するよう促した。授業終了時は履修登録者自身が使用したパソコンと周辺機器を消毒した後、科目担当者が教室すべての消毒を実施した。科目担当者が実施した 1 回の授業あたりの消毒時間は 40 分程度であった。なお、データ収集のために別教室を使用した場合は、科目担当者が教室すべての消毒を

[1] 本報告は、愛知みずほ大学・愛知みずほ短期大学「遠隔授業グッドプラクティス」（2020 年 12 月 17 日実施）の発表の一部である。

行った（1 回あたり 30 分程度)。

2) ハイブリッド授業（対面授業と遠隔授業（オンライン）の併用)

感染者数が増加してきた 2020 年 11 月より 2021 年 1 月の授業終了までの期間はハイブリッド授業を実施し、履修登録者が自由意思で対面授業と遠隔授業（オンライン）を選択できるようにした。

3) 授業時間外の個別対応

2020 年度後期授業期間を通じて、本学では大学への学生入構が認められていたため、対面での個別対応希望者には対面で対応した。しかしながら大半の履修登録者は、対面での対応を希望しなかったため、メールでの対応が中心であった。「心理学実験Ⅱ」は、「心理学実験Ⅰ」単位修得済みの学生が履修登録としていたことから、1 つの実習レポートあたりの個別対応数は最大 50 件であり、「心理学実験Ⅰ」と比較すると少なかった。

3. 実習内容

「心理学実験Ⅱ」では、9 つの実習（「思考」、「他者との相互作用」、「向社会的行動」、「対連合学習」、「プライミング」、「行動観察」、「再認記憶」、「SD 法」、「神経心理学的テスト」）を実施した。すべての実習データは対面授業にて収集した。2019 年度と同様、すべての実習について、質問紙準備、実験プログラム作成等は科目担当者が行った。

「心理学実験Ⅰ」では、履修登録者は「実習レポート作成チェックリスト」を用いて主に実習レポートの形式に関するセルフチェックを実施した。それに対し、「心理学実験Ⅱ」では、履修登録者は「実習レポート作成ルーブリック」を用いて実習レポートの形式に加えて内容に関するセルフチェックを実施した。

以下、実施順に概要を報告する。

1) 「思考」 実習

2 人 1 組になって実験者役と実験参加者役を経験しながら「ハノイの塔」を用いたプロトコル分析を行い、実習レポート執筆には個人データを用いた。あわせて「Wason の 4 枚カード問題」を実施し（回答は Microsoft Forms にて提出)、履修登録者全員のデータを用いて実習レポートを作成した。すべての実験は紙ベースで実施した。

2) 「他者との相互作用」 実習

2 人 1 組になって実験者役と実験参加者役を経験しながら「囚人のジレンマゲーム」を実施し、架空の対戦相手の選択が協力行動に及ぼす影響を検討した。実習レポート作成には、履修登録者全員分のデータを用いた。すべての実験は紙ベースで実施し、Microsoft Forms により回答提出を求めた。

3) 「向社会行動」 実習

「最後通告ゲーム」および「独裁者ゲーム」と性格特性の関連を検討し、実習レポートを作成した。すべての実験は紙ベースで実施し、全員が実験者役となって教示文を読み上げた後、実験参加者として回答し、Microsoft Forms により回答提出を求めた。

4) 「対連合学習」 実習

単語の有意味度による対連合学習のプロセスの違いを検討し、実習レポートを作成した。対連合学習のための刺激はカタカナ 2 文字とし、Microsoft PowerPoint を使用して提示した。2 人 1 組で実験者役と実験参加者役を経験しながらデータ収集し、Microsoft Forms により回答提出を求めた。

5) 「プライミング」 実習

語彙判断課題を用いた連想プライミング効果を調べることにより、意味記憶の貯蔵と検索の様相を検討し、実習レポートを作成した。2 人 1 組になって実験者役と実験参加者役を経験しながら語彙判断課題を実施した。なお、実験プログラムは Excel Visual Basic for Applications（Excel VBA）を使用して科目担当者が作成した。実験終了後、Microsoft Forms によりデータ提出を求めた。

感染者数が増加しつつあったことから、これ以降の実習実施順序をシラバスより変更すること、「行動観察」実習は実習内容を変更する案を提示した。履修登録者から申し立てがなかったため、原案通りに進めることとした。

6) 「神経心理学的検査」 実習

2 人 1 組になって実験者役と実験参加者役を経験しながら「フランダースの利き手テスト」および「線分二等分課題」を実施した。実習レポートは、各自のデータのみを用いて作成した。

あわせて、2 人 1 組になって実験者役と実験参加者役を経験しながら、「再認記憶」、「SD 法」の実習レポート作成のためのデータ収集を行った。

これ以降の授業は、対面授業と遠隔授業（オンライン）を併用してハイブリッド授業とし、感染症拡大状況等に基づき、各自で毎回出席授業形態を選択するよう指示した。なお、毎回ハイブリッドにて授業を実施することを周知し、どちらの授業形態で出席するかは、科目担当者への連絡は不要とした。

7) 「再認記憶」 実習

顔の再認記憶実験における課題の違いが再認成績に影響するかどうかを、信号検出理論を適用して検討することを目的とした。顔の再認記憶課題の結果をもとに、履修登録者全員のデータを使用して実習レポートを作成した。

8) 「SD 法」 実習

SD 法（セマンティック・ディファレンシャル法）は、形容語対からなる複数の評価尺度を用いて対象の評価を行う。本実習では、SD 法を用いて代表的な都道府県のイメージを検証することを目的とした。実習レポート作成には履修登録者全員のデータを使用した。

9) 「行動観察」 実習

2019 年度は希望者を対象に東山動植物園（名古屋市千種区）で様々な動物の行動観察を実施した。2020 年は感染症対策のため東山動植物園での動物の行動観察は中止し、全員で同じ動画（動物園におけるチンパンジーの行動）を時間見本法にて観察を行い、各自のデータをもとに実習レポートを作成した。

4. まとめ

2020 年度後期開講科目「心理学実験Ⅱ」を、対面授業、遠隔授業（オンライン）と対面授業のハイブリッド方式で実施した。感染症対策に対する履修登録者の意識が高かったことから、幸いにもすべての履修登録者が感染症に罹患することなく、休講することなくすべての授業を実施することができた。

2020 年度前期科目より遠隔授業が導入されたことに加え、「心理学実験Ⅱ」の履修登録は「心理学実験Ⅰ」の単位修得を前提としていたため、履修登録者が遠隔授業に対して柔軟に対応できるようになっていた。このことを踏まえ、「心理学実験Ⅱ」の目的である「自らデータを収集し実習レポートにまとめる」ことに注力した結果、対面授業と同様に質の高い実習レポートが多くみられた。

大学所在地および在学生の通学圏内の新型コロナウイルス感染症拡大状況、各大学の感染症対策ガイドラインに加え、科目の特性を考慮して「心理学実験」の実施形態を判断することが望ましいと考える。

引用文献

文部科学省高等局（2020）. 令和２年度における大学等の授業の開始等について（通知）. https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf （最終閲覧日 2020 年 9 月 30 日）

高濱 祥子（2020）. 小規模大学における新型コロナウイルス感染症対策下の「心理学実験」実施報告. 瀬木学園紀要, 17, 65-69.

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。